

346 上皮小体機能亢進症の部位診断における 2放射線核種 (Tl-201, Tc-99m) シンチグラフィ の有用性について

太田淑子, 川崎幸子, 牧正子, 広江道昭,
日下部きよ子, 重田帝子 (東女子医大 放射線)
小原孝男, 藤本吉秀 (東女子医大 内分泌外)
東間紘 (東女子医大 腎外)

Tl-201-chloride による上皮小体・甲状腺像より肉眼的に Tc-99m-pertechnetateによる甲状腺像を差し引くことにより上皮小体の腫大の有無がわかる。さらにComputerによる病変部位の検索も併用した。抽出された上皮小体の重量を指標にして、この検査法の診断的有用性を検討した。対象症例は確定病理診断のついた50症例(原発性32例, 続発性18例)であった。結果は1.0g以上の腫瘍は100%の確率で部位診断ができた。specificityは94%であった。部位診断には超音波検査やCTが用いられるが、超音波検査では異所性の上皮小体が検出されにくいこと、またCTでは病変部が小さいために画像に現れにくいことより2放射線核種シンチグラフィが部位診断に最も有効であるといえる。
